

国文学研究資料館外部評価報告書

2015年3月

国文学研究資料館

はじめに

国文学研究資料館は、日本文学研究コミュニティの要請のもとに日本学術会議の勧告によって、1972(昭和47)年に創設、2004(平成16)年度に国立大学法人法に基づき、大学共同利用機関法人人間文化研究機構を構成する研究機関となりました。その間、国内各地の日本文学とその関連資料の調査、マイクロフィルムによる収集を継続し、日本文学をはじめとするさまざまな分野の研究者の利用に供するとともに、それらに基づく共同研究の推進を目的としています。

当館が行っているそのような研究・事業については、館内に設置する評価委員会において、自己点検評価を行い、その結果を踏まえ、将来にむけての業務の改善に努めています。

このたび、外部の有識者に委員を委嘱して、外部評価委員会を設置し、当館の2013(平成25)年度学術企画連携部の事業実績について、評価を行っていただきました。学術企画連携部は国際交流室、展示企画室、広報出版室の3室で組織され、当館の研究・事業内容を広く公開・普及するため、講演会、展示、シンポジウム、講習会等の諸活動を行うとともに、他機関との連携及び国際交流を図る活動を行っています。

外部評価委員会では、行われた活動に関する様々なデータや当館担当者へのヒアリングに基づき詳細な検討が行われ、国際日本文学研究集会に関しては、外国人の若手研究者の人材育成に貢献しているとの評価がなされましたが、その一方で、展示や講演会の広報活動においては努力不足の御指摘をうけました。

この外部評価報告書は、外部評価委員会による評価の結果を踏まえ、各委員からいただいた御指摘・御意見、委員会の構成、委員会の記録などを取りまとめたものです。当館の教職員は、この報告書に示された評価結果を真摯に受け止め、これからの当館の方針や運営に生かしていく所存です。

外部評価委員会の委員を快くお引き受けいただき、有益なご意見をたまわった外部委員の方々に心から御礼を申し上げます。

平成27年3月

国文学研究資料館長 今西 祐一郎

1. まとめ

国文学研究資料館外部評価委員会
委員長 三角 洋一

外部評価委員会においては、人間文化研究機構の中期目標や中期計画にもとづく国文学研究資料館学術企画連携部の業務の位置づけについて説明があり、業務の実績に関する報告とアンケート結果などの資料が示されたことを受けて、国際交流室、展示企画室、広報出版室の三部門の活動につき質疑のうえ検討することにした。各委員の評価がそろったところで、まとめに関する打ち合わせを行なった。さっそく、アンケート結果については自己点検のコメントが付してあるとよいと指摘された。以下に、そのまとめを掲げる。

国際交流室担当の(1)第37回国際日本文学研究集会は「テキスト・ジェンダー・文体—日本文学が翻訳されるとき—」という国際集會にふさわしい適切なテーマで、2日間にわたるプログラムも研究発表11本、ショートセッション4本、ポスターセッション6本と充実し、幅広い分野のさまざまな研究レベルの成果が示されていた。国内外の研究者の交流と、外国人の若手研究者の人材育成に大いに貢献している。今後の課題としては、参加者数が100名前後なのはいっそうの拡充がはかられてよく、ただちに実現することはプログラムの構成上困難をとまなうかもしれないが、たとえば使用言語に日本語のほか英語を加えることも考えられよう。

(2)日本古典籍(くずし字)講習会は、ドイツ連邦共和国のボン大学と連合王国のオクスフォード大学で開催された。たいへん好評で、日本の古典籍を扱う海外の図書館司書や研究者の育成に大いに寄与している。日程や参加費などの条件整備を工夫し、能力別・目的別のクラス分けを考えるなどして、ますます充実させていってほしい。

展示企画室担当の(1)常設展示は新しく設けられた試みで、「和書のさまざま」は古書籍の実物に接して親しむよい機会となり、パネルの解説もよくできていて、古典の普及に役立っている。来館者がついでに展観に立ち寄るところがちょっと残念で、まだ手探りの段階ではあると思うが、一般向けにもっと平易に展示品の解説を行なうとか、逆に具体的な研究の事例と連動させた説明を加えるとか、HP上に英文併記で展示内容を公開するとかなどして、入場者数の向上に工夫を凝らすことが期待される。年8回の特設コーナーも、来館者を増やすきっかけとなるよう宣伝に力を入れてほしい。

(2)企画展示「渋沢敬三からのメッセージ 渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元×渋沢敬三の夢みた世界」は他施設の催しや地域とも連携した、時宜を得た企画であった。実業史や民俗学などの方面でも学界に大きく貢献している。ただし、展示の目的・意図がチラシの宣伝に十分盛り込まれたか、広報活動が行き届いていたか、いささか惜しまれるところがあった。

広報出版室担当の(1)連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」は、受講者に好評を博

し、高い満足度が示されており、日本古典の普及に貢献している。できれば、近代に近く親しみのある近世の著名作品についても「くずし字で読む」講座があればよい。あえて問題点を挙げれば、受講者層がやや高齢のリタイア世代に集中しているところがあり、より若い年齢層、主婦も参加できるような工夫が望まれる。また、くずし字の読解を一つの技能にとらえるならば、対象を少しずらして、専門的な技能をもつ者の裾野を広げる役割を担わせることも考えられてよい。

(2) 「古典の日」講演会は第3回を数え、都心の会場に場を移し、文学と絵画、『源氏物語』の読解と現代語訳を内容とする魅力的なテーマで、よき講演者を得て、300名以上の聴講者を集めた。このこと自体は「古典の日」の周知、日本文学の普及に役立っているといえるが、たとえば大学共同利用機関としてイニシアティブを執ることにより、各地域の大学の国文学科と連繋して共同企画を立てるなど、全国的に盛り上げるという方向を目指す行き方もあるのではなかろうか。

(3) アーカイブズ・カレッジは、前身の「史料管理学研修会」以来、通算59回を数える長い伝統をもつ、古文書や公文書などを扱うアーキビスト養成の研修会である。よく練られた講義と実習のカリキュラムにより、長期コースと短期コースが備わり、短期コースは本年度は遠野市立図書館で開催された。地方会場を設定していることも意義深く、満足度も高く、日程も受講者数も適切な規模と認められる。アンケート結果からは、受講した専門機関職員や大学院生から、それぞれの事情によりさまざまな要望が出されていて、集中してみっちり学ぶのもよいが、期間を分割するなどしてゆとりをもたせてはどうかという意見も散見した。参加希望者を増やす意味でも、わずかとはいえ検討の余地があると思われる。

(4) 日本古典籍講習会は、古典籍を所蔵する機関の図書館員を対象に、書誌学の専門知識を得て整理方法の技術を習得することを目的とするもので、受講者の満足度がきわめて高く、専門司書の育成に大きな成果をあげている。日程や受講者数はほぼ適正であるが、4日間の集合時間や開講時間については改善の余地がありそうである。

以上、平成25年度の業務の実績に対する外部評価のまとめとする。

2. 各委員からの評価

1 国際交流室

(1) 第37回国際日本文学研究集会

【評価のポイント】

- ①「テキスト・ジェンダー・文体—日本文学が翻訳されるとき—」というテーマの設定は適切か。
- ②研究発表11本、ショートセッション4本、ポスターセッション6本というプログラムは適切か。
- ③国内外の日本文学研究者の交流を促進するなど、学界に対して貢献するものとなっているか。
- ④外国人の若手研究者の人材育成に役立っているか。

○三角委員長

外国人研究者の多くが抱く着眼、方法に沿ったテーマで、日本人研究者にとっても幅広い視点に立って国際的に発信していくにふさわしい企画であったと思う。ショートセッションやポスターセッションを設けることで、研究分野のバラエティやさまざまな研究段階の成果が盛り込まれたことにより、国際交流の促進がはかられ、外国人若手研究者の育成に貢献できたといえよう。

○濱口委員

- ①テーマ「テキスト・ジェンダー・文体—日本文学が翻訳されるとき—」は、これまで(第21～36回)の幅広く包括的な主題の中に日本文学を位置づけようとしたテーマ設定の流れに沿っているように見受けられ、また今回はジェンダーという時宜に即した視点を盛り込んだ点は意欲的であり、適切なテーマ設定であった。
- ②研究発表11本、ショートセッション発表4本、ポスターセッション発表6本というプログラムの設定については、2日間という時間的制約の中では適切であり、またこれらの3発表に関しては、多くの発表者を募りやすくするためにテーマを設定しないとした配慮もあり、評価できる。なお、ポスターセッション以外の発表における使用言語は「日本語」としているが、発表要旨が日本語と英語との二カ国語で準備されたのは、国際的な研究集会という性格上、当然のこととはいえ適切な対応であると思われた。
- ③第21回からこれまでの国際日本文学研究集会の国内外の日本文学研究者の参加者数が100名前後で推移していることは、この研究集会が国内外の日本文学研究者の間において十分に認知されており、研究者の交流を促進し、25年度計画における「研究の一層の国際化を図るため、国際日本文学研究集会を開催する」とした国際化の目

標を達成するための順当な実施にもなっていて学界に対する有効な貢献をしていると評価できる。ただし「大学共同利用機関」としての国文学研究資料館が主催し、日本文学研究の発展を図るための国際的な研究集会の参加者規模としては、さらなる拡充が期待される場所である。

- ④外国人の若手研究者の研究発表は11件中8件あり、またショートセッションやポスターセッションにおいても過半の発表者があり、海外からの参加者が総参加者数の3割にも達していることは、この研究集会が、外国人の若手研究者の人材育成に大いに役立っていることは明らかである。また、発表者の中に、国文学研究資料館外来研究員が2名いたことは、資料館が招請している外国人若手研究者の育成が実効を伴っていることの表れと評価されるが、その一方で、在外大学所属の若手研究者の来日発表が2件だけであり、国際日本文学研究集会の目的からすれば、やや少ないように思われる。これが来日経費等の問題に起因するのであれば、何らかの支援の方策を今後の検討課題することもあっても良いのではないかと思われる。ところで、25年度はたまたま総合大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻の大学院生の発表がなかったものと思われるが、専攻学生には積極的に発表するよう指導があっても良いのではないかと思われる。

○湯浅委員

シンポジウムのテーマとして、「テキスト・ジェンダー・文体—日本文学が翻訳されるとき—」はそれ自体、決して不適切ではないが、国際日本研究集会の研究発表やショートセッション、ポスターセッションとの連動性が図れると理想的であると考えられる。

研究発表、ショートセッション、ポスターセッションからなるプログラムとそのバランスは適切である。

国際日本文学研究集会はすでに長い積み上げにより、海外の知名度もあり、国内外の日本文学研究者の交流を促進しており、学界に貢献するものとなっている。

以上のことは、当然、外国人の若手研究者の人材育成に役立っているが、さらに使用言語に英語を加えることができれば、さらに多くの英語圏の若手研究者を集めることが可能になると思われる。

(2) 日本古典籍（くずし字）講習会

【評価のポイント】

- ①海外の図書館司書や研究者などの育成に役立っているか。

○三角委員長

毎年、2ヶ国で3日間かけての「くずし字」の講習はたいへん好評のようで、日本の古典籍を扱う海外の図書館司書や研究者の育成に大いに役立っていると認められる。受講

者には初級と中級の者が入り交じっているようで、今後なお工夫が求められる。

○濱口委員

25年度は、日本資料専門家欧州協会 EAJRS との共催によって日本古典籍(くずし字)講習会が、ドイツのボン大学日本韓国研究専攻(平成25年6月5-7日)及びイギリスのオクスフォード大学東洋学部(平成26年3月24-26日)における2回の開催があった。参加者からのアンケート回答から読み取れることは、海外における日本の古典籍を扱う司書職や日本古典文学研究者が、「くずし字」に関する専門的な研修への渴望をこの講習会によって癒している様子であり、さらに講師である今西館長への期待感であることから、この講習会が海外の受講者の育成に大いに寄与していることは明かである。

この有意義な講習会を継続していく上で、参加者からは日程上の問題点(周知時期、開催時期など)や参加経費(宿泊費、交通費)の負担、また担当者側からは資料等に対する出費など、解消しなければならない課題がいくぶんか存在しているようである。この事業は、国文学研究資料館が取り組むべき中期目標における国際化及び若手研究者の育成の方向に沿ったきわめて重要な事業であり、その効果が海外における日本文学関連の司書業務や若手研究者の実力養成に直接的に反映するので、開催頻度、開催地域、参加者への配慮、ホスト機関の負担などの条件整備に工夫を凝らし、継続して開催されることが期待される。

○湯浅委員

評価者は昨年度、一年間の海外研修(ケンブリッジ大学)に従事したが、その折にも、海外でくずし字についての教示を求められる事が多く、それに対応出来た場合には感謝されることが多かった。その経験からも本講習会の意義は大きいし、海外の図書館司書や研究者などの育成に役立っていることは間違いないと考える。

海外に渡った日本の古典籍は多く、これら資料群を扱う環境にある図書館司書・研究者の数も少なくない。それ故に、くずし字講習受講者のレベル、受講動機、目的の多様なことが予想され、この全てに対応することは出来ないにしても、ある程度能力別クラス分けや、目的別クラス分けが出来ると、より効果的かと考える。

また、可能ならば使用言語を日本語以外でも開催出来れば、さらに新たな需要等の局面も拓けると考える。

2 展示企画室

(1) 常設展示「和書のさまざま」

【評価のポイント】

- ①「和書のさまざま」というテーマの設定は適切か。
- ②従来の特別展示を多く開催することから、平成25年度から常設展示を設置したこ

と等について、本展示が学界に対して貢献するものとなっているか。

③社会貢献として、本展示が日本文学の普及の役に立っているか。

○三角委員長

入館者が必ず見て、前近代の書籍のかたちや内容にふれ、親しむように常設展示することは、かたちあるものとしての日本文学を広く社会に普及することに貢献していると思う。古典籍を扱わねばならない日本古典籍講習会の受講者には好評であったが、今後は一般向けにも興味をひき、役に立つように、展示品の解説をていねいに行なうなど、改善する余地がある。

○濱口委員

- ①「和書のさまざま」というテーマの下、日本の古典籍の書誌学的な解説、日本文学の流れとともにあった写本や版本の実物の紹介、そしてパネルによる丁寧な説明によって、和書に対する系統的な知識が学べる企画は、入場者のアンケートからも伺われるごとく好評を博しており、また定期的な展示替えを期待して再訪する入場者も見受けられることからテーマは適切に設定されたものであったと評価できる。
- ②25年度から常設展に変更したことに伴い、「和書のさまざま」というテーマの下、古典籍の形態的な変遷や写本から版本への流れ、卷子本から線装本への変遷など書誌学的な基礎をしっかりと所蔵書籍の実物を展示しながらの説明や日本文学の時代ごとの特質も学べる内容は、図書館員等を対象とした「日本古典籍講習会」の専門的な立場の入場者からも講習内容に沿って参考になると評されるほど本格的な構成となっている。また「特設コーナー」を設けたことは、小規模とはいえ常設展示の中における一種の企画展としての役割を果たし、「和書のさまざま」展をより充実した展示にする上で貢献があり、さらに展示資料の保護のために定期的に書籍等の展示替えをすることは、「特設コーナー」とともに常設展でありながら再訪者を引き寄せる相乗効果を生み出している。さらにアンケートから伺われる入場者の職業区分から「研究者」や「学生」が見受けられることから学界に対する一定程度の貢献はあると評価できる。したがって、今年度から、従来の企画展に替えてこのテーマでの常設展を設置することにした判断は、国文学研究資料館がいかなる研究機関であるかを来訪者に認知してもらうためにはきわめて適切であったと評価できる。
- ③アンケート情報から、様々な世代及び職域の人々が常設展示に対して興味を示していることが読み取れるので、社会貢献として常設展示が日本文学を普及する上で一定程度役立っているといえる。しかしながら、アンケートの入場者数の集計結果からも明らかなように一日当たりの入場者は必ずしも多いとはいえ、しかもアンケートにも、折角の優れた展示にもかかわらず入場者が少なすぎという複数の指摘がある。国文学研究資料館の社会貢献のあり方の一つとして日本文学の「普及」があるこ

とから、展示の質はすでに十分であるので、それに見合った入場者数の向上に工夫を凝らすことを期待する。

○湯浅委員

「和書のさまざま」というテーマは、国文学研究資料館ならではであり、適切なものである。

常設展示を設置したことは、学界に貢献するものであるとともに、社会貢献として、日本文学の普及の一助になることは間違いない。

なお、日本古典文学の資料収集と研究を主事業としている国文学研究資料館として、和書資料の展示とともに、研究事業についての具体的な内容を伝えることに主眼をおいた展示も必要かと思われる。資料展示の際のわかり易い解説も研究の反映であることは間違いないが、直接的な研究内容の開示も必要と考える。

(2) 企画展示「渋沢敬三からのメッセージ 渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元×渋沢敬三の夢みた世界」

【評価のポイント】

- ①「渋沢敬三からのメッセージ 渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元×渋沢敬三の夢みた世界」というテーマの設定は適切か。
- ②本展示が学界に対して貢献するものとなっているか。

○三角委員長

館内単独の企画でなく、渋沢敬三記念事業実行委員会、立川市教育委員会、国営昭和記念公園事務所などの共催者を得ての、ちょっと毛色の変った企画で、渋沢栄一記念財団ほか共催「周流する記録——長野で発見された台湾の古文書」とともに、地域とも結びついた、人間文化研究機構の一翼をになう国文学研究資料館の枠を広げたよい企画で、学界にも社会にも大いに貢献している。

○濱口委員

- ①「渋沢敬三からのメッセージ 渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元×渋沢敬三の夢みた世界」は、渋沢敬三没後50年を期して渋沢資料館が開催した企画展「祭魚洞祭」及び国立民族学博物館の特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」と連携した企画となっているとともに、渋沢敬三が夢見た野外博物館「スカンセン博物館」のあり方を回遊展示として昭和記念公園内のこもれびの里の立川市の市指定文化財「旧石井家住宅」のオープン及び「立川の古民家」の開催に合わせて、国文学研究資料館が所蔵する歴史アーカイブズの公開という意味合いをもって国文学研究資料館が所蔵する「日本実業史博物館コレクション」のアーカイブズの展示を

行うためにテーマが設定されており、極めて時宜を得た適切な企画であると評価できる。

②明治維新期の日本の近代化において、渋沢栄一が果たした歴史的な意義に関する研究や論評が増してきている現在、国文学研究資料館が所蔵する資料の展示は学界への貢献に大なるものがある。また、その入場者数からするアンケートの回収率は極めて低いものの、熱心にアンケートに回答してくれた方からの評価は満足度が非常に高く、また自由記述からも実業史資料の公開を歓迎し、青淵コレクションを実見できたことを評価し、さらに今回の展示の構成についても評価するものが見られるなど学界への貢献のみならず地域への貢献も大きなものがあったものと思われる。

ただ課題は、実業史や民俗学としての好展示であったにも拘わらず、入場者数が限定的であることである。今後は広報の工夫をすることで、国文学研究資料館の所蔵歴史アーカイブズの展示などの多方面における活動内容を広く周知させていく努力が必要かと思われる。

○湯浅委員

渋沢敬三からのメッセージ 渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元×渋沢敬三の夢みた世界」というテーマの設定自体は不適切ではないが、専門的な知識をもたない一般の来場者に対して展示の目的をわかり易く広報できていたかが気になるところである。企画展示のチラシからは、その意図は伝わってこないかもしれない。実際に足を運んで展示をみれば、展示物からさまざまな興味が沸いたであろうと思われるが。

展示は学界に貢献するものになったと考える。

3 広報出版室

(1) 連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」

【評価のポイント】

- ①「くずし字で読む『源氏物語』」というテーマ設定は適切か。
- ②社会貢献として、本講座が日本文学の普及の役に立っているか。

○三角委員長

仮名の書道を学んでいる人以外には、なかなか「くずし字」に親しむ機会はないことと思われる。世界文学の一つに数えられる『源氏物語』は、もともと「くずし字」で書き写して伝えられてきた作品で、明治以降、近代活版印刷により活字本で読むように様変わりしたのであるから、より親しみ味わうには「くずし字」で読むのがよく、全五回の講座で手ほどきを受けるのは意義深いことである。本年度は台風接近により一回休みになり、残念がる声が多く寄せられたのはもっともなことであり、可能なら予備日が設けられるとよい。

○濱口委員

①日本文学の普及のためという目的の下、『源氏物語』を取り上げたことは、日本文学の古典中の古典であるのみならず、多くの地域で組織されている市民向け読書会などで対象とされるほど、一般の方々にとっては身近な古典作品であることから適切な選択である。しかもそうした『源氏物語』読書会では写本のままの連綿体のくずし字テキストを直接読む機会はほぼないと推定されることから、この連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」は他との著しい差異化を果たしているといえる。したがって、この連続講座を前年度に引き続き開講したことの意義は、テーマ設定の適切さとともに大きいものがある。

②4回の講座に毎回90名前後の参加者があり、受講者のほぼ全員近くから回答されたアンケートによれば、受講者の多くが60～70歳代のいわゆるリタイア世代で、内容面では変体仮名の基本からの解説があり、また資料等が良く整備されていることもあって盛会とともに好評を博し、非常に高い満足度が示されている。このことから、年度計画における研究成果の発信と社会貢献として、多摩地区を中心として、地域連携及び次世代の利用者を重視した講演会・講習会等を実施するとした趣旨に即しつつ、日本文学の普及に大いに役立っていることは高く評価できる。

ところで、「大学共同利用機関」である国文学研究資料館の研究水準の向上を図るといふ目的の下に、その成果の社会的共有という観点からパブリック・リレーションを構築することは紛れもなく重要なことであり、この連続講座が果たしている社会貢献度の高さとその質の高さとは余りにも明々白々である。ただ国文学研究資料館の設置の目的とパブリック・リレーションとのあり方とを照らし合わせた上での率直な感想としては、一般の方を対象にしたこの講座の開設は、あたかも牛刀を用いている感なきにしもあらずのところがある。

○湯浅委員

くずし字で読む『源氏物語』のテーマ設定は極めて適切である。一級の古典作品を当時の人々が受容した形で読むことが重要であり、しかも優れた指導者に導かれて読む必要がある。その条件を満たすものであり、定番講座として今後も継続的に開催されることが望まれる。

可能であれば、『源氏物語』は定番として、現代に近いという意味で、別に近世期の著名な古典作品についても原典で読む講座もあってもよいと考える。

上記の適切性から見て、本講座は社会貢献として日本文学の普及の役に立っていると考える。欲をいえば、講座開催曜日時刻の関係もあろうが、受講者が60代・70代に集中していることがあり、より若い年齢層、主婦などが受講出来る工夫も望みたい。

(2) 「古典の日」講演会

【評価のポイント】

①社会貢献として、本講演会が日本文学の普及の役に立っているか。

○三角委員長

きわめて有意義な「古典の日」が制定されているので、大いに日本古典文学の普及に役立てたいのであるが、私が承知しているのは他に関西で紫式部顕彰会、関東で紫式部学会が講演会を催しており、国文学研究資料館が著名な講師も招いて、東京の都心で、四、五百名の規模の講演会を主催しているのは、社会に大きく貢献しているといえる。

○濱口委員

「古典の日」講演会を、今年度は都心会場に移して開催することによって一般の方々の交通の便宜を図り、さらに企画内容と講師の人選に当を得て 323 名の参加者を得たことは、本講演会の社会貢献は十分に果たされ、かつ「古典の日」の制定日に関わる『源氏物語』を演題の一つとしたことは日本文学の普及に十分なる役割を果たした企画であった。

しかしながら 450 名定員の都心会場を確保したにも拘わらず 323 名の参加者であったことは、この講演会の周知を図る広報活動に一層の工夫が課題となっていることを示していよう。広報の工夫によって参加者が増加することは、社会貢献度の向上とともに、ステークホルダーに対する責任を果たすことにもなる。ところで、チラシには明示がなかったが、HP上では「国立大学フェスタ 2013」の事業の一環として開催された旨が示され、国立大学や大学共同利用機関の教育研究活動の社会的周知に連携するものとして評価できる。しかし「古典の日」講演会が全国に存在する国立大学における様々の地域貢献事業の中のワンオブゼムとなってしまう、国文学研究資料館による「古典の日」という記念日における一般の方々向けの講演会としての周知にはあまり効果が上がらなかったように思われる。日本文学の普及という国文学研究資料館の方向性と「古典の日」とには深契するものがあり、この日に国文学研究資料館が主催する講演会に対する社会的な期待値は大きいので、今少し別な観点から開催企画を見直しても良さそうである。例えば、この記念日制定を推進した“古典の日推進委員会”が、本格的な企画をこの日に向けて実施しているが、そことの連携を取りつつ資料館での事業の内容や企画を構成するということも考えられるであろうし、あるいは資料館の大学共同利用機関であるという立場から国文学科や国文学関連講座を持つ連携大学等との間で、この記念日の事業を共同企画し、そのイニシアティブを執るといったあり方も考えられ、こうしたところに国文学研究資料館の役回りがあるのではないかと思われる。

○湯浅委員

日本古典文学の資料収集と研究を主事業としている国文学研究資料館として、「古典

の日」講演会は是非、継続的な開催をお願いしたい。昨年度実績でいえば、絵入りの古典籍や、『源氏物語』という一級の古典を取り上げたのは、バランスがよく、古典に親しむきっかけを提供する趣旨に沿ったのもであった。開催場所も都心部としたこともよく、社会貢献として、本講演会が日本文学の普及の一助になったものとする。

(3) アーカイブズ・カレッジ

【評価のポイント】

- ①多様な史資料を取扱う専門的人材を養成の役に立っているか。
- ②日程、受講者数など研修の規模は適切か。

○三角委員長

史資料を専門的に取り扱う人材を養成する目的で、基礎や理論から始めて、実習組み込みなど、初心者から中級者までを指導し、好評を博しているようである。内容が盛り沢山で、受講者にはきついようにも思われたが、充実していてよい。アンケートによると、それぞれに事情があるからか、日程、受講者数について要望が出ていて、工夫の余地があれば調整してほしい。

○濱口委員

- ①「アーカイブズ・カレッジ」は、25年度の開催で、その前身の「史料管理学研修会」以来59回目を迎えたということであり、長期コースの6科目のシラバス及び短期コースの4科目から、古文書や公文書をはじめとするアーカイブズを利用し、また保存管理する業務を担うアーキビストを養成するに十分に練られたカリキュラムが提供されていることが読み取れる。また受講者によるアンケート回答からも満足度が非常に高く、多様な史資料を取扱う専門的人材を養成することに役立っていると言える。さらに国文学研究資料館における資料の管理や保存の業務から得たノウハウや文献学等の学術研究の成果を発信する社会貢献の目標を十分に達成していると評価でき、かつこうした専門家の養成こそが国文学研究資料館に対して社会が期待している事業の一つであると思われる。
- ②長期コースの実施時期と日程の7～9月の6週間に関して、受講者へのアンケートの集計結果から何う限り実施時期については2ヶ月に涉ることから最善の設定時期は見出しがたいようであるが、日程については現行の6週間と4週間とが適切とされている。短期コースでも、実施時期の希望は集中せず、最善の設定時期は見出しがたいようである、日程としては現行の2週間よりは1週間を多くが希望している。受講者側の専門機関職員や大学院生といった立場から、実施時期や日程についての都合はあるが、史資料を専門的に扱うアーキビストを養成する研修課程のカリキュラムの設定上、日程の短縮は困難ではあろうが、国文学研究資料館における業務と研究

とに基づくノウハウと成果とを社会に還元する有意義な事業であるからこそ、希望者の参加を促し易くするためにも検討の余地はあるのではないかと思われる。また受講者数について、長期コース 30 名、短期コース 35 名の定員とした点に関しては、講義のみならず実習も伴う研修であり、受講者からもその多少についての不都合さに対する指摘もないことから適切な規模であると評価できる。

○湯浅委員

現在、ますますアーキビストの養成が必要となっているが、国文学研究資料館では、すでに 1988 年よりこの社会的要請に応えるべく研修会（資料管理学研修会）を行なってきた。2002 年度からのアーカイブズ・カレッジは、これらの経験を活かして実施の内容・方法の改善を図ったものである点、多様な記録資料を取り扱う専門的な人材の養成に一定の役割を果たして来たことは間違いない。

長期と短期のコース設定、短期では地方会場も設定していることも重要であり、実習も含むことも受講者に取って重要なプログラムである。

これらの事を総合して考えた場合、現在の日程の設定及び受講者数などの研修の規模は適切であると判断される。

(4) 日本古典籍講習会

【評価のポイント】

- ①各所蔵機関の図書館員等の人材育成の役に立っているか。
- ②日程、受講者数など研修の規模は適切か。

○三角委員長

国立国会図書館の協力を得て、日本古典籍の扱い方にかかわり、きめ細かに知識と実務にわたって講習がなされており、経験の浅い古典籍の担当者の実力養成に大いに貢献していることは、アンケートの回答に色濃く反映されていると判断された。

○濱口委員

- ①日本古典籍講習会は、25 年度で 11 回目となり、従来の 3 日のカリキュラム日程を 4 日に変更したということで、講義と実習との研修内容の一層の充実が図られたものと思われる。カリキュラムは、古典籍の基礎の講義から写本、くずし字、版本、蔵書印、奥付等に関する専門的講義、データベースや目録の作成、資料の保存や補修の実習、さらには国文学研究資料館及び国会図書館での作業実務や書庫の見学などとなっている。こうしたカリキュラム構成は、研修対象者である日本古典籍を所蔵する機関における経験年数 3 年以内の図書館員を古典籍の書誌学的知識を身に付け、古典籍の保存や取扱いの業務をこなす専門司書へと着実に育成していく上で役立っている。

るのみならず、わが国の古典籍を扱う大学や専門機関における業務の向上が実現されているものと高く評価できる。また、参加者の満足度アンケートの結果もほとんどが「満足」としていることから、この講習会の内容の専門性と有益性が裏付けられる。さらに国文学研究資料館における、こうした専門的な業務と研究を背景とした知見を社会に還元することこそが、資料館に対して期待されている社会貢献事業であると思われるので、今後、さらなるカリキュラム等の研修内容の充実と合理的な研修時期や時間の工夫とを行って、この講習会が継続されていくことを期待するものである。

- ②実施時期と日程の1月下旬の4日間に関しては、受講者へのアンケートの集計結果から何う限り最善の設定となっているようである。また受講者数について、32名定員とした点に関しては、講義のみならず実習も伴う研修であり、受講者からもその多少についての不都合さに対する指摘もないことから適正な規模であると評価できる。ただし、研修中の4日間の集合時間や開講時間等の設定については改善の余地がありそうである。

○湯浅委員

日本古典籍講習会の事業は各所蔵機関の図書館員等の人材育成に役立っているとともに、日程、受講者数などの研修の規模も適切である。

国文学研究資料館外部評価委員会

委員名簿

委員長 三角 洋一 大正大学特命教授

濱口 富士雄 群馬県立女子大学長

湯 浅 茂雄 実践女子大学文学部教授

任期：平成26年4月1日～平成28年3月31日

国文学研究資料館外部評価委員会

実施状況

○第1回外部評価委員会

日時：平成26年 7月25日(金) 15:00～17:15

議事：

- 1 人間文化研究機構国文学研究資料館について
- 2 中期目標・中期計画等について
- 3 平成25年度外部評価について

○第2回外部評価委員会

日時：平成26年11月12日(水) 10:30～11:25

議事：

- 1 平成25年度外部評価報告書について